『異邦人』を読んで

情報通信工学科５年　天野 未来

『異邦人』この言葉の響きに、私は冷たさを感じる。自分とはわかり合えない存在、いやわかり合おうとも思わない存在。人はその存在を自分達の中に認めようとはしない。

裁判官や傍聴人、ムルソーの証言を聴いた全員の目に、彼は『異邦人』として映った。彼らにとって、母親の葬儀で泣かず、その翌日恋人と喜劇映画を観に行くムルソーは、異常な存在だった。母親の葬儀で涙を流し、その後しばらくの間悲しみに沈んでいることが、人のとるべき当然の行為であり常識であった。その常識に当てはまらない者は、人間が本来持っているはずの感情や愛情を持たない、『異邦人』なのだ。

しかし、本当にそうだろうか。

私は、この話を読んで、人には誰にでもムルソーのような一面があるのではないかと感じた。私達の周りには、一般的な常識や道徳があふれている。そういった周りから入ってくる情報の影響を受けながら、人は自分の中に自分なりの常識や道徳を創っていくものだと思う。そして、その常識や道徳にあった自分でいるために、無意識のうちに嘘をついているのかもしれない。知らず知らずのうちに、周囲だけでなく、自分自身にも嘘をついているのかもしれない。

ムルソーは母親を愛していたし、母親が生きていてくれることを望んでいた。ただ彼は、自分の中に、社会の常識や道徳を持っていなかった。彼にとって意味のあるものはその時の気分だけだった。だから、彼には嘘をつく必要はなかったのだ。ムルソーは、常に自分自身に正直であればよかった。

私は、ムルソーのような生き方を最初かっこいいと思った。周囲の眼を気にして、自分を飾ったり、自分自身を安心させるために、嘘をついたりすることをせずに生きていくにはとても難しいことだ。自分の中の常識や道徳と照らし合わせて、自分自身を良く思い、満足するために、感じている以上のこと、あるいは感じてもいないことを言ったり、したりするのは、人間のずるい部分だと思う。ムルソーにはそういうずるさがない。私は、その潔さをかっこいいと感じたのだ。

でも、それは、とても怖いことだということに気がついた。

ムルソーのお母さんは本当は養老院に行きたくなかっただろうし、恋人のマリィも「愛していない。」と言われる度につらい思いをしただろうと思う。ムルソーが自分に正直に生きることで傷つく人もいたのだ。

私の中にもムルソーはいる。妙に冷めていたり、無感動だったりする瞬間がある。ムルソーは人生が無意味だと考えていたが、そうかもしれないとも思う。太陽が酷く暑くまぶしかったら、自分が何をしているかわからなくなるかもしれない。

きっと、ムルソーを受け入れなかった人達の心の中にも、ムルソーはいたのだと思う。

そして、彼ら自身、そのことに気付いていて、そういう自分の一面を恐ろしく感じていたのではないかと思う。自分の中のムルソーが顔を出す度、自分を冷たく非常な人間だと思い、恐れと罪悪感を抱いていたのではないだろうか。だからこそ、ムルソーのような人間が自分達の社会に存在していることを脅威に感じ、排除しようとしたのではないか。

周囲に、自分自身に、見栄をはって演技する。そういったずるさも必要なのだと思う。そういった部分も含めて、人間なのだ。ムルソーにそういったずるさが欠けていたために、彼は自分の好きな人達をも傷つけてしまったのだ。そして、社会の中での自分の存在も否定されてしまった。

また、ムルソーには、大切な人も、ものもなかった。神も信じていなかった。そして人生に意味を見出し、神を信じる人達からの孤立をも願っていた。

だが、本当に人生は意味のないものだろうか。正直に言えば、私は分からないと答えるしかない。しかし、もし人生を無意味と考えるなら、きっと生きてはいけないだろう。大切に思うもの、信じられるもの。そういうものがない限り、生きていくことはできないだろう。人生に何らかの意味を見出し、自分の中に指針を持つことが、生きていく上で力になっていくのだ。

私は『異邦人』ムルソーに好感を持つ。彼は普段親切で、穏やかに日々を送っていた。そして何より、何にも媚びることのない正直さに、私は強い魅力を感じる。けれど、その正直さが、社会の中で色々な人達と接し、生きていく時、人を傷つけ、様々な障壁を作ってしまうということも確かなのだ。社会の一員として生きていく以上、社会の常識や道徳を自分の中に持つことが必要なのだ。

私は、人生は意義があるものと信じて生きていきたい。そうすることが、人生を本当に意義あるものにすると思うから。

『異邦人』　アルベール・カミュ著　窪田哲作訳　新潮社